

研究主題を設定するに当たって

公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構
研究研修委員長 安達 讓

現在、世界の先進諸国では、子どもが遊びを通して主体的な学びを深めることが問題解決型学力の育ちの根幹に関わっていることが明らかになり、乳幼児期からの遊びを中心とした教育が重要視されています。かつての高度経済成長時代のように仕事の内容を正確に理解し、できるだけ早く処理する仕事はPC等の機械に置き換わり、今は存在しない職業に多くの子どもたちが就くことが確実視されています。日本においても、従来から大切にしてきた環境を通じた主体的な学びがアクティブラーニング、汎用的学力や自分の意思と相手の意見を調整するなど非認知的能力の根幹を形成するものとして、その重要性が認識され、まさに幼児教育を起点とする学力を向上させることが我が国の課題となりつつあります。

そのような社会情勢の中で、子ども・子育て支援新制度がスタートしましたが、子どもの育ちや教育・保育の質についての議論は充分とは言えません。真の意味での幼児期の教育・保育の質の向上、特にプロセスの質の向上のために私たちが果たす役割はますます重要になってきています。

そのような情勢を踏まえ、平成28・29年度の教育研究主題を

「人生のスタートにこそ良質な教育を」としました。

人生の始まりである乳幼児期に全ての子どもが愛されて育ち、自分が自分であっていいという感覚と、人は信頼するに値する存在であり、他者と共に居ることが心地良いという感覚が育つために私たちは子どもの思いに寄り添い、子ども一人一人の良さが伸びるように支えていくことを大切にしたいと思います。

「良質な教育」と言う言葉には、教育の質を高めることだけではなく、子どものより良い育ちを願う、私たちの願いも全て含んでいます。日々の保育で、今、この子にどのように関わっていけば良いのか、どのような環境を用意すれば良いのか、迷ったり、悩んだりすることもあります。子どもの心もちを理解しようとするのがその子の育ちにとって大変重要なことです。子どもの姿、保育者、環境(遊び)を俯瞰し、客観的に理解し保育を構造的に考えることを大切にしながら、一人一人の幸せを願い、共に育ち合う良質な保育を実践したいと思います。

また、保育という営みは子ども理解から始まるものであり、発達を無視して、保育者の意図を一方的に押しつけるものではありません。どのように関わるかの前に子どもの育ちを保育者同士が語り合い、子どもの心もちを理解すること、育とうとしていることを理解すること等、子どもを真摯に見つめ理解しようとする保育臨床の視点をもって始まるものでなければなりません。

(公財)全日本私立幼稚園幼児教育研究機構研究研修委員会では、今後、幼稚園教育に公教育としてこれまで以上に保育の質の向上に関しての厳しい目が向けられることを受けて、特に以下の点については重点的に取り組んでいきたいと思っています。

- ・ 幼児教育・保育の質の向上を目指して、見えにくい子どもの育ちを公開保育や園内研修等のカンファレンスを通じて語り合うことやその語り合ったことを学校評価等を通じて保護者や社会と共有していくことが重要である。その推進役としての公開保育コーディネーター（評価者）の養成とフォローアップ研修に取り組んでいく。
- ・ 乳児期の発達を理解を基盤とした家庭教育の支援と質の高い保育の実践。3歳からの質の高い幼児教育（集団での教育）を実践するには3歳までの育ちが重要であるので、家庭教育や施設での保育の違いを超えて乳児期の育ちを支えるための研修の充実や保育者の育成に取り組んでいく。
- ・ 教育・保育並びに子育て支援等に係るニーズや課題が多様化、複雑化してきている。それに伴い、園長等の園のリーダーの役割も益々重要性を増している。園の諸課題の解決に向けて、保育者等の自律性や協働性に基づいて園の力量を高めていくために柔軟で、強力なリーダーシップを兼ね備えたリーダーの資質とその向上が求められている。こうした状況の中で、園長等の資質向上のために「教育・保育を創る」「マネジメントを構築する」「保護者・地域・社会・行政と連携する」の3つの課題を中心にリーダー研修を実施していく。

本研究課題については、保育現場の実践者はもとより関係領域の研究者や保育者養成校の関係者、保護者、地域の関係者等すべての人々に活発に議論していただく中で乳幼児期の教育の重要性が共有されることを切に願います。さらには、本研究課題が各園、各地域等様々な場で活かされることで、日本の教育・保育の構造的な質やプロセスの質が施設の類型を超えて充実し、向上することにより、すべての子どもたちのより望ましい発達と生活の充実に寄与する一助になることを期待します。

重点課題研修・養成講座

■重点課題（1）

●0～2歳児の発達と保育

■重点課題研修設定の理由

質の高い保育を行うためには、乳幼児期の発達の特性や発達の過程をしっかりと理解し、その時期にふさわしい生活を保障することがきわめて大切である。乳児の保育を行う認定こども園においては、乳児期が愛着形成を基礎とした情緒の安定や他者への信頼感が醸成される大切な時期であることを踏まえ、子ども一人一人の発達の特性や個人差に応じた個別の対応をしていくことが求められる。それには、子ども一人一人の生育歴や心身の発達、活動の実態等に即して、個別的な計画を作成することが必要となる。しかし、一部のこども園においては、乳児の発達の特性をあまり理解しないまま、3歳児の保育内容押し下げたかたちでの2歳児保育を行ったり、集団での保育形態が中心であったりと課題が浮かび上がってきている。また、満3歳以上の幼児が生活する幼稚園においても、乳児の発達や保育についての理解なくして、質の高い保育を実践することは難しいと言える。乳児期から幼児期への子どもの発達の連続性を踏まえ、長期的な見通しに立った質の高い保育を行うためには、このような重点課題研修が必要であると考えた。

また、幼稚園やこども園は家庭での子育てを支援するという役割も担っている。在園児だけでなく、地域の子どもの成長、発達を促す場としての役割、遊びを伝え広げる場としての役割、保護者と保育者、保護者同士が子育ての喜びを共感する場としての役割、子育ての在り方を啓発する場としての役割、子育てに関する相談に応じたり情報を提供したりする場としての役割など、多様な役割を果たすことが期待されている。特に家庭で子どもと向き合って育てることを選択した保護者に対して、幼稚園やこども園が子育ての支援のセンター的役割をどう担っていくかは、大きな課題であるといえよう。家庭で子どもをどう育てれば良いのか分からない、誰にも相談できないといった、保護者の子育てに対する不安やプレッシャーが高まっている状況の中で、保護者が安心して子どもを育て、親としての喜びや自信をもつことができるような子育ての支援を考えていきたい。

0～2歳児の育ちが土台となって幼児教育が成り立つことを確認し合い、各地区の研修会において0～2歳児の発達と保育についての学びを深めていただきたい。

■重点課題（2）

●園長・リーダー研修

■重点課題研修設定の理由

これまで、私立幼稚園は、建学の精神に基づき、独自の教育方針やそれぞれに特色

ある教育を行い、日本の幼児教育を大きく牽引してきた。しかし、このたび「子ども・子育て支援法」による新たな枠組みが作られ、認定こども園等の乳児からの一貫した「乳幼児教育」の在り方が、あらためて問われている。

今、取り組まなければならないことは、これまで私立幼稚園が培ってきた「学校教育」の始まりという考え方をベースにした特色ある幼稚園教育の視点を堅持しつつ、時代の要請に応える新しい乳幼児期の教育・保育を創っていくことである。

それを実現させるためには、まず、園長や園のリーダー（以下園長等と記す）の役割が、重要である。言うまでもなく、それぞれの園では、園長等は、その園を動かしていく原動力であろう。園長等が、子どもを理解し、その教育・保育の方針を語り、教職員と共に質の高い教育・保育を創っていこうとする前向きな姿勢が無ければ何も生まれないことは明らかである。つまり、園長やリーダーが、「教育・保育の質」を高めるための扉を開く役割を担っている。

そのためには、園長やリーダーは、果たしてそれらを進めていく資質を自らが持っているのかと常に振り返り、自己評価していく謙虚なかかわりを忘れてはならない。

それも、独善的な自己評価でなく、研修や振り返りの場に主体的に身を置き、「学ぶ」ことを通して自らの評価を正しく行い、資質を高めていく努力こそ求められる。だからこそ、園長等の資質を高めるための研修フィールドが欠かせないのである。

また、園長等の研修のねらいとして、特に「園の保育を語ることができる園長・リーダー」というテーマを掲げたい。園長等が「学ぶ」べきことは多岐に渡るが、その筆頭にあるのが、いつも子どもの立場に立った「保育臨床」の学びである。

今、そこにいる、一人一人の子どもを語れること、一人一人の子どもの「発達」を語れること、そして、一人一人の子どもの「発達」とともに「集団教育」の意味を語ることができていく園長等の「学び」を立ち上げていくことを目標としたい。そうした研修を積み上げることによって、園長・リーダーの資質の向上にとどまらず、園全体の「質」の評価と向上につながっていくことに期待したい。

■重点課題（3）

●教育・保育の質を高める

■重点課題研修設定の理由

近年、諸外国で幼児教育の重要性が強く語られている。OECD等の研究報告でも、幼児教育は国の発展を意味づけるひとつの柱であることも明らかにされている。しかし、幼児教育を、単に広げていくことが重要なことではない。その一番の要点は「教育・保育の質」である。「教育・保育の質」を高くしていくことにこそ課題がある。

私たちは、「子ども・子育て支援法」による、新たな「教育・保育」の体制が構築される時代を迎え、混乱や不安もないわけではない。しかし、それぞれの園でどのような形で「教育・保育」を進めていくにしても、大切にしたいことは「教育・保育の質」を高くしていくということを強く目指していくことであろう。その課題は、まず基本的なことから押さえていかななくてはならない。「教育・保育の質」とは何かを明確にすること。さらに、それをどう捉え具体的にどう質の改善につなげていくかを考えるこ

とである。

「教育・保育の質」をどのように捉えるかは、様々な研究や考え方がある。たとえば、構造の質（カリキュラムの在り方、園庭や保育室の面積、学級定員、保育者と子どもの比、職員配置等）、過程の質（子どもの見取り、計画、評価、改善の方法のプロセス等）、成果の質（実績評価、テスト等）という捉え方もある。このような様々な研究に学び、私たちの実際に照らし、「教育・保育の質」をきちんと捉え、一步一步質の改善に向けて進む一人一人こそが先決である。

ここで、「教育・保育の質」を高めていくための研究の要点を3つ提案したい。

①教育・保育の質にかかる「事例研究」

質の研究と改善の実際、また、そのプロセスを具体的な「事例」を通して交流し研究していく。

②「現職者の質」を問う・資質を高めるための「園内研修」の在り方の研究

教育・保育にかかわる現職者の資質を向上させるためには、どのような内容の園内研修が必要なのか。また、それをどのように行うのか。

③教育・保育の質の向上を「見える化」していくための研究

保育者間、保護者、地域に、教育・保育の質の改善や向上を明確に示す「見える化」の在り方を研究していく。

愛されて育つ子ども

(研究・研修のテーマ例)

- 「いのち」の尊重・尊厳を学ぶ保育
- 幼児期からの人権教育の在り方を考える
- 子どもたちのやさしさや思いやりの育ちを考える
- 幼児の健康な体と心を育む
- 多様な子どもの受容とクラスの育ちを考える
- 保育と食育
- 幼児の安全を守る保育と環境
- 幼稚園の危機管理体制と家庭との連携
- 各地区独自の課題

■研究・研修の視点

私たちが出会う子どもたち一人一人はそれぞれの特徴や個性を持つ「違う」存在である。しかし、すべての子どもに共通していることは、その子にふさわしい生活を送ること「自分の人生の主人公として生きる」権利を持っているということである。一人の子どもがこの世に生を受けた瞬間から、愛情に包まれた空間で育つことは幸せで健全な成長に繋がる大事な土台である。この愛情に包まれた空間は、親子・家庭環境から始まり保育実践の場へ繋がり、親・子・保育者間の相互作用によって保たれていかなければならない。乳幼児期から、親や家族、そして保育者にありのままを受容される体験を十分にもつことで、子どもたちは他者を信じ、同時に自分を信じるができるようになり、相手と人間的なコミュニケーションができるように育っていくのである。

子どもたちは幼稚園という環境の中で、様々なものやコトと出会い、あらゆるものに触れ学んでいる。心わくわくする体験、美しさや不思議を感じる体験など心の内面を揺り動かす経験を通し、感性が磨かれ心が豊かに育まれる。やさしい目で、暖かい手で受け止められ、心をかけられて過ごす園生活。そのような環境の中で、子どもたち一人一人の「いのち」と「育ち」が確かなものとして守られる。『自分は愛されている』ことを感じながら、自己肯定感を醸成し、周りにいる友だち・先生と共にいることを喜びながら成長していくことが最も重要である。

一人一人の子どもの「心」という目に見えないものと向き合い、保育者自らの心を添わせ、手をかけ 目をかけ 思い願いをもって行う保育の実践が今何にも優先して求められている。

このような土台の上に、子どもが安全で健やかな園生活を送るためのリスクハザードを考えた環境について、また今様々な課題を持つ食育の観点からの保育について意識を向上させることが重要である。想定できうるあらゆる危機に対する管理体制につ

いての知識を持ちそして考え学び合い、想定外の危機に対する臨機応変な意識も同時に養っていくことが保育者の資質として大切である。

【研究・研修の手がかり】

- ①「いのち」の尊重・尊厳を学ぶ保育の内容を実践事例を通して研究する。
- ②幼児が園生活の中で「いのち」を感じたり、学んだり、大切にしたりする「環境」について、実践事例をもとに研究する。
- ③子どもの人権を大切にした「園生活の在り方」や「家庭生活の在り方」とは何かを考える。また、そのための保護者へのかかわりや連携の在り方を研究する。
- ④幼児の「やさしさ」や「思いやり」の育ちをテーマにした保育記録の読み取りやDVDなどの視覚映像等を分析し協議する。
- ⑤幼児の体と心を育むために必要な活動や体験とは何か具体事例を示しながら協議する。
- ⑥幼児期における「食」の今日的課題を考え、意見を出し合い整理分析して、それぞれの対応について考え協議する。
- ⑦「呼吸法を学ぶ」「感染症・伝染病への対処」「健康記録の整備と活用」などの実務的な研究研修に取り組む。
- ⑧事故・災害等の緊急時「対応マニュアル」「避難マニュアル」「防災計画」「防災マニュアル」「防犯マニュアル」等の情報交換や研究研修を行う。

子どもと共に育つ保育者

(研究・研修のテーマ例)

- 子どもの心に寄り添うための様々な保育の評価方法
- 自園の保育を見つめ直す公開保育の在り方
- 自然と触れ合う遊びの体験や遊びの創造
- 得意分野を磨き遊びの専門性を高める
- 社会人として学ぶべきマナー
- 仕事の効率化と組織の活性化
- 自園の保育理念や教育課程の理解と考察
- 保育を語るリーダーの育成
- 同僚性を育むコミュニケーション
- 保育者のメンタルヘルスと仕事に対する向上心
- 各地区独自の課題

■研究・研修の視点

「保育の質」は様々な方向からとらえることができるが、その基本となるのは「保育者の資質」である。現状に満足することなく、日々の保育を振り返り、よりよい保育へと進化し続けようという前向きな姿勢が、「保育の質」を高めることにつながる。保育者は、子どもを一方向的に「育てる」のではなく、子どもと「共に育つ」べき存在といえる。

まず保育者に欠かすことのできない資質として、明るい笑顔と豊かな感性で子どもに寄り添える人間性が挙げられる。保育者から注がれるたくさんの愛情を基盤に、子どもは安心感と信頼感をもちながら幼稚園生活を送ることができるようになる。そのためにも、保育者一人ひとりが心身ともに健康であるとともに、保育者集団としても互いに認め合い育ち合う信頼関係が築かれるよう、コミュニケーション力を高め同僚性を育てていくことが重要である。

また、保育の専門家として子どもの心を理解するためには、子どもと共に遊び、過ごし、育ち合う共同生活者という意識をもちながら、子どもの内面に目を向け子どもの心に寄り添う必要がある。何気ない日々の姿に子どもの成長を発見し、そのことを保育者同士や保護者と分かち合い喜び合う姿勢を大切にするとともに、語り合い学び合う過程を積み重ねることで、子どもを肯定的に見つめるまなざしの質を高めていきたい。子どもを理解し、保育を振り返るためのツールとして、様々な評価方法を知り使いこなすことも必要である。また、公開保育を行ったり参加したりすることは、自園の保育のよさや課題を発見し、保育の質向上につながっていくものなので、公開保育を保育者としての「育ちの場」ととらえ、主体的かつ積極的に取り組んでいくことが求められる。

遊びの専門性を身につけることも、保育者の成長にとって重要な視点である。幼児期においては、遊びや生活といった直接的・具体的な体験を通して生きる力の基礎を育むことが重要であると考え、保育者は遊びと生活の専門家でなければならない。しかし、近年、特に自然や生き物と触れ合う経験が乏しいまま大人になった保育者が増えている。経験年数や年齢にかかわらず、自然体験、生活体験、社会奉仕体験などを重ねて、自らの経験を積極的に豊かなものにしていくことと同時に、子どもごころや遊びごころをもって、遊びを工夫し、創り出し、提案できるような遊びのエキスパートを目指すことも目標としたい。

さらに保育者は、園内では組織の一員として期待された役割を責任感をもって果たしていくことが求められ、社会とのかかわりにおいては、単に保育を伝えていくだけでなく、子育て支援、保護者支援、小学校や地域との連携など様々な役割が求められる時代になっている。このような意味で、社会人としてのマナーを身につけることはもちろん、広い視野をもつことも大切である。

私たちは幼児教育の専門家である。プロフェッショナルに必要なのは、自分の仕事に誇りと使命感をもって、常に真摯な態度で挑戦し続ける気持ちである。保育に正解はなく、保育者に完成形はない。だからこそ、子どもの成長を喜ぶように、保育者としての自分の成長も喜び続けられる人間でありたい。

【研究・研修の手がかり】

- ①子どもたちの多様な姿を読み取ることは、保育者としての質の向上にとっても大切なことである。人間性豊かな保育者が、子どもに寄り添い幼児理解を深めることの重要性を考える。
- ②教育課程を中心に連続性のある育ちを保障することは重要である。子どもたちと共に日々のくらしを創り出す保育者として役割を考える。
- ③子どもたちの遊びやくらしを、写真やエピソードの記述などをもとにした技法を利用し語り合うことで、保育の質や同僚性が高まると考える。多様な技法や手法を用い育ちや学びの理解、内面の読み取りにつながる研修方法を考える。
- ④自園の保育を互いに見合うことは、保育理解や同僚性を高めるために有効な手段である。保育や子どもを様々な観点で語り合うことのできる、互いに保育を見合う研修の在り方を考える。
- ⑤建学の精神や園としての持ち味を理解することや、自園の保育理念や教育課程を理解することはとても大切である。自園の教育を語り理解し実践しながら、教育の編成や課題の改善につなげていく。
- ⑥自然の不思議さや美しさ、ものごとの面白さなどを体を通して理解することが大切である。自ら遊びを工夫したり、協同して遊びを作り出したりする環境について考える。
- ⑦職場における同僚性を育むためには、話しやすい雰囲気を作る必要がある。風通しのよい人間関係の中でメンターの思いや役割を理解する時代のリーダーの育成を考える。

教育・保育理論

(研究・研修のテーマ例)

- 0・1・2歳児（乳児期）の育ちと3・4・5歳児（幼児）の生活と育ち
- 愛着の形成と愛着障害
- 幼児の発達を学ぶ（メタ認知、発達の最近接領域、ことばの諸機能の発達等）
- 社会性の育ちと規範意識の育ち
- 発達の連続性を踏まえる保育
- 学びの芽生えとしての保育
- 応答的な保育（環境と保育者）
- 日本の保育制度・世界の保育制度
- 現代の保育制度の課題
- 各地区独自の課題
- 現代社会における子どもの問題

■研究・研修の視点

子どもの発達は一人一人個人差があるが、大きく捉えると順序性や段階が見られる。幼児教育は、幼児の発達を捉えた教育課程に沿って行われているが、その背景は西洋で生まれた保育思想から、日本で独自に発展した教育・保育思想と最新の発達理論により構築されている。

教育・保育にかかわる保育者が教育・保育思想の歴史をひも解き、諸外国の保育制度や最新の発達理論を学ぶことは、子どもの育ちへの深い理解や援助の精神的・哲学的な柱を持つことができ大切なことである。

この度の教育・保育教育の制度の改訂で、保育をとりまく環境が大きく変化し始めている。

保育者は、一人一人の幼児の発達や成育環境に応じながら、どの子に対してもよりよい保育、質の高い保育を実践することが求められている。そのために、幼児の育ちを理解するためには、前段階である乳児の育ちや最新の発達理論を学ぶことが大変重要である。

幼稚園は小学校の下請け教育を行っているのではなく、幼児期ならではの独自の学び（学びの芽生え）や育ちを保証しているのではあるが、幼児期の学びと育ちを児童期にどうつなげていくか、見通しをもつことも大切なことである。

また幼児教育は、意図的な環境のなか、様々な仲間との触れ合い、自分の思いを主張し、相手の思いを受け入れる体験を通して、折り合いをつける経験をし、人間関係を構築する手立てを身に付けていく。他者の良さに気付き、自分との違いを理解することで、人間関係を深め、伝え合い、協力し合って学び合うようになる。また保育者は、一人一人の発達の特性に応じながら、どの子も認められ受け入れられていく保育

を考えることが必要である。成長に合わせて、子供たちが主体性を十分に発揮できる環境を整備し、子どもと共に保育を展開していく中で応答的に、柔軟に環境を再構成していかなければならない。したがって、保育者の役割は、将来に向けた人を育てるという大きな役割を担っているということを念頭におき、自己研鑽を積み、長期的視点に立って、幼児期の育ちを学び考えることが望まれる。

【研究・研修の手がかり】

- ①領域の視点からみた発達、とりわけ、ことばの機能の発達、社会性・道徳性などに関連させ、子どもの育ちを考える。
- ②発達の連続性を考慮したうえで、保育の在り方、子どもの生活や育ちについて考える。
- ③自我の育ちや心が豊かに育つためには、自己発揮・自己抑制の経験を通して、自分や他者への信頼感が育つことが大切である。保育者の子どもとの向き合い方を踏まえながら考えてみる。
- ④制度・社会・地域・家庭など、子どもを取り巻く環境の変化の中で、目の前の子どもの育ちと保育の在り方について考える。
- ⑤協同的な遊びや学びを豊かにしていくために、応答的な環境について考え、どのような生活や遊びの経験が学びの芽生えとなるか考える。
- ⑥保育の歴史と思想をひもとき、教育・保育のあるべき姿について考える
- ⑦幼児を理解し、環境を構成するために、乳幼児の発達理論を基に考える

子ども理解

(研究・研修のテーマ例)

- 子どもとの温かい信頼関係の構築に向けて
- 保育の記録と保育の振り返り
- 子どもの発達にそった育ちの理解と保育実践
- 学びの連続性を考える保育と記録の在りよう
- 子どもの心を「聴く」 — 受容と傾聴 — …子どもの内面理解について
- 気になる子や障がいのある子の保育実践と家庭支援について
- 特別支援教育における個別の指導計画・支援計画の在り方
- 各地区独自の課題

■研究・研修の視点

子どもの教育は、子ども一人一人の潜在的な可能性に保育者が気づくことから始まる。子どもは環境との相互作用の中で、自分の興味や欲求に基づいて直接的・具体的な体験を通じて人格形成の基礎となる豊かな「心情」を育み、心を揺り動かし、物事に自分から関わろうとする「意欲」や健全な生活を営むために必要な「態度」を培い、次の活動へとつなぎ、新たな学びの基礎を築いていく。そのためには、保育者は子どもの発達や興味関心に十分注意をはらい、一人一人の子どもの育ちを理解していく必要がある。また家庭から園での集団生活、学校等へと段階的に施設形態が変わったとしても子どもの育ちは連続的である。子ども理解においては人生の諸段階の「連続性」にも留意すると同時に、家庭と園との社会的な環境面としての「連続性」も、子どもの姿を多面的に理解するために念頭に置く必要がある。

では、子どもを理解するためにはどのような具体的な視点が必要だろうか？

①子どもを肯定的に見る目をもつ

子どもとの温かい関係を築き、信頼関係をはぐくむことで、子どもは本来の姿をあらわしていく。能動性を発揮し活発に活動する姿を受けとめ、その中にある子どもの思い、心情に気づくことが大切である。特に自己肯定感が日本の子どもの場合、OECD諸国の中で低いことが指摘されている。乳幼児期から子どもの姿を肯定的に捉える視点を持ちたい。

②遊び、活動の意味を理解する

子どもが今行っている遊び、活動にどのような意味をもっているかを理解することが大切である。遊びや活動の意味を、子どもの内面的な成長にどのように関係するかを具体的に様々な記録を通じて理解することである

③発達する姿をとらえる

発達の道筋のたどり方には、その子どもらしい特性がある。また発達の様々な面に

は相互関連性や個別性がある。このことを十分に理解して子どもの姿を様々な角度から多様な方法で多面的にとらえることが大切である。子ども理解のうえに立ち、さらに子どもがどの方向に育ってほしいかを洞察する目をもつこと、同時に幼児期を中心に乳児期、学童期、さらにその後の人生の育ちの連続性を視野に入れ、園内で子ども理解とその共有を図り、保護者とも成長の道筋を共有できるよう努めたい。

このように子どもを理解するためには、様々な観点から子どもの姿を見つめることが大切であるが、特別に支援を必要とする子の保育にあたっては、特に必要不可欠なものである。定型発達の子どものとは異なる感性や興味関心をもつ「彼ら」の姿を省察し、発達の姿を見通し、どのような保育を展開していくかを十分に検討したい。子どものあるがままの姿と向き合うことから保育を考え、園全体で家庭支援、地域の学校、療育機関等との連携も視野にいれて、インクルーシブ教育を園でどのように受け入れるか検討することも大切な視点であろう。

【研究・研修の手がかり】

- ①子ども理解を深める視点と方法について考える。(視点、フレームをどう設定するか？子どもを肯定的に捉える視点とは何か？)
- ②保育記録と保育の振り返りの関係について考える。(記録の蓄積をどう保育に還元していくか？個別記録と保育記録、エピソードや画像の活用など最新の記録の在りようから考察する。)
- ③子どもの心情を理解するためにはどのように子どもと向き合うのか、子どもの心情を洞察するために何が必要なのかを考える。
- ④子どもとの信頼関係を築き、温かい雰囲気保育を構築するためには、保育者のどのような働きかけや保育としての取り組みが必要か考える。(保育の質、とりわけ保育者のかかわり方が子どもの発達に与える影響を考える。)
- ⑤子ども理解を深め、園全体の保育に活かすためには、どのように保育記録を職員、保護者と共有したらよいかを考える。(子ども理解をベースに園のチーム保育をどう確立していくか、同僚性を基礎にチームとしての学び、園内研修の在りようを考える。)
- ⑥特別に支援を必要とする子どもの困り感を、保育者はどのように受けとめ、どのように対処したらよいか？集団での過ごし方や遊びの様子を見て、その子どもが何に興味を持っているのか、何に困っているのかを読み取り、安心して過ごせる環境を園としてどのように組み立てるかを考える。
- ⑦障がいに関する基礎的な知見を習得し、「今いる幼児の姿」に敷衍し、どのように受け入れ、家庭支援(連携)を図り、更に小学校、専門機関との連携、ネットワークを構築し、子どもの育ちを“面”(家庭・地域)と“線”(乳幼児期～学童、青年期)とでどのように支えていくかを考える。

保育実践

(研究・研修のテーマ例)

- 幼稚園教育要領、認定こども園教育・保育要領の理解と自園の教育・保育の理念
- 子ども理解に基づく教育課程の編成や指導計画の作成
- 年齢や発達に応じた保育内容やかかわりを理解する
- 遊びの意味と育ちへのつながり
- 園行事の取組みと子どもの育ち
- 協同的な遊びと学びの実践
- 子どもとともに作り出す環境構成
- 子どもの主体性がいきる保育者のかかわり
- 一人一人を生かす集団保育の在り方
- プロセスがみえる記録の工夫
- 記録の共有と活用の仕組み作り
- 保育者間のカンファレンスの在り方
- 保育の振り返りと計画・実践への有効な活用

■研究・研修の視点

日々の保育実践は、各園の目指す教育・保育の理念を基盤として、子どもの姿に応じた専門的な計画力や実践力の上に成り立っている。子どもの主体性が生きる保育実践を展開するためには、子どもを見る目、子どもに寄り添う姿勢とともに、環境の構成、遊びの内容と広がり、的確な記録等の知識・技術を磨く必要がある。そして、それらを毎日適切に行っていくための方法や仕組みを考えていくことが日々の保育の充実につながっていく。

私立幼稚園・認定こども園は、教育課程の編成、指導計画の作成およびその実践においては、幼稚園教育要領、認定こども園教育・保育要領に準拠しなければならない。各園独自の建学の精神、教育・保育の理念に基づく実践には、幼稚園教育要領、認定こども園教育・保育要領の正しい理解が必要である。そして、保育を実践する上で、子どもの年齢や状況に応じた適切な保育形態や遊び、教材に対する深い理解は欠かせない。

また、保育の計画と実践と評価は、別々に考えるのではなく、それらを常に総合的にとらえる保育の組み立てが重要である。それは今ここにいる子どもたちの理解を深めていく方法であり、保育の実践をていねいとらえていくプロセスである。従って、子どもの姿を踏まえた計画は環境構成に反映され、実践ではその場の子どもたちの状況によって変えていける柔軟性が大切な要点となる。保育の評価は、子どもの姿が具体的に示され、実践が分かりやすく説明できる記録に基づいて行われる。常に保育の実践そのものを一番大切にして、子どもたちの姿を基に語ることのできる保育を失っ

てはならない。

保育の振り返りと評価にあたっては、保育者個人での省察とともに、保育者間の保育カンファレンスを日常的に持つ事が大切である。いろいろな見方をお互いに許容することによって、保育者間の同僚性が醸成され、園全体の保育の質の向上につながっていく。

【研究・研修の手がかり】

- ①自園の教育課程がめざす理念について、園内外で理解を深めて共有していく方法を考える。また、子どもの姿や保育実践と照らして、教育課程や指導計画を適宜見直していく。
- ②異年齢混合保育、ティーム保育、預かり保育等、様々な保育形態の特長や課題を明確にして、園の状況に応じた柔軟な対応を考える
- ③0、1、2歳児の保育および子育て支援と、満3歳以降の教育・保育との連続性について考える
- ④幼児教育における遊びと学びの意味を考え、小学校以降の教育を意識した保育について考える。
- ⑤指導計画から日々の指導案へ、子どもの姿を踏まえた展開方法を考える。
- ⑥地域資源を活かしながら子どもとともに作り出していく環境構成や、子どもの主体性が尊重される保育者のかかわりについて考える。
- ⑦子どもの学びや保育のプロセスが分かりやすい記録の工夫を考え、その記録を保育者間はもちろん、保護者や地域社会と共有して活用していく仕組みについても考えを広げていく。

子どもが育つ家庭や地域

(研究・研修のテーマ例)

- 共感し合える保育者と保護者・地域社会との関係づくり
- 幼小の連携と幼稚園教育の在り方
- 子育ての支援としての「預かり保育」と「親子登園」の在り方
- コミュニティ・スクールの現状と課題を踏まえ、地域とのかかわりを見直し、保育に活かす
- カウンセリングマインドを活用した教育・育児相談の在り方
- 各地区独自の課題

■ 研究・研修の視点

近年、少子高齢・高度情報・グローバル社会の進展など、社会環境が大きく変化する中で、子どもの遊びも大きく変化してきた。合わせて規範意識の低下、生活習慣の未確立、コミュニケーション能力の低下が指摘されており、子どもたちの育ちに関する様々な課題が浮き上がってきた。

一方、地域では人々の地縁的なつながりが薄れてきており、かつて多くの地域で見られていたような、地域での子ども同士の遊びや子どもたちと大人との交流といった光景は少なくなってきた。また、家庭においても核家族化や地域における人間関係の希薄化を背景に、子育てに関する悩みや不安をもつ保護者の増加や孤立化の問題などが指摘されている。

そうした問題に対して、幼稚園においても平成 12 年度より「未就園児の親子登園」という形で子育ての支援に取り組んできた。幼稚園という教育の場を活用して、保護者同士の交流や多くの子どもたち同士が関わる機会を提供している。合わせて育児相談に応じたり、子育て情報を提供するといった活動を通して、地域における幼児教育のセンターとしての役割を果たすことが期待されている。

急激な少子高齢社会の到来が危惧されており、その背景には、若い世代の未婚化・晩婚化、そして晩産化の進行が指摘されている。そこには、社会の近代化とともに自分自身の仕事への充実感と生活の安定性への希求がある。女性の社会進出に伴い、就労される母親が増えてきたことから、子どもたちが長時間幼稚園で過ごすことができるように、平成 7 年度より「預かり保育」の制度がスタートした。教育時間終了後に希望者を対象に行われる教育活動であり、子どもの心身の負担を考慮し、子どもの生活にふさわしい指導計画を立てる必要がある。そして家庭との緊密な連携を図り、保護者が幼稚園と共に幼児を育てるという意識が高まってほしいと願うところである。

このように子育ての支援がますます充実していく中で、平成 18 年度からは、認定こども園制度によって 0 歳からの乳児も幼稚園に就園できるようになった。0 歳から小学校就学前までの様々なニーズを持つ家庭に対して、保育者は親子関係や家庭の変容

を学ぶ必要も出てきており、保護者に対しての育児・教育相談の手法も身に付ける必要がある。また子どもの貧困が問題になってきた直接の原因として、ひとり親家庭の増加や虐待・DVといった問題も浮かび上がってきた。様々な問題を抱える家庭の子どもにどのように関わっていけばよいかも保育者は学んでいく必要がある。

地域社会との連携については、小学校との連携を特に重要視したいし、子どもの育ちは幼児期と児童期に区切れているのではなく連続している。幼稚園と小学校の教師が様々な子どもの育ちの課題について共通理解するとともに、子どもに必要な体験が得られるように教育課程を編成し、幼稚園、小学校それぞれが教育活動に創意工夫を凝らし、教育の充実を図ることが求められている。

現在、小・中学校においては地域の人的資源を活用するコミュニティー・スクールが推進されている。子どもの育ちは学校の教師による教育だけでなく、家庭における親子のふれあいや友達との遊び、そして地域の人々との様々な体験を通して根付いていくという考え方から、各地域の関係者の教育力に期待して実際に授業に参加していく形態での取組みも進められている。幼稚園でも地域の教育力を活用して、総合的に教育を進めていけるように、お互いに連携して継続性のある具体的な仕組みづくりが強く求められる。

家庭や地域の教育力が希薄になってきた時代には、保育者自らがもっと目を外に向けて様々な人たちの協力を得ながら教育・保育に取り組んでいくことが大事になってくる。子どもが育つ家庭や地域の現状をしっかりと学んで、その力を園の教育・保育に活用していくことが望まれる。

【研究・研修の手がかり】

- ①幼児が地域や地域の人々からどのようなことを学んでいるか、学ぶことができるかを考え、その学びを生かす方法について検討する。
- ②地域の人的資源を活用するコミュニティー・スクールの現状を把握し、今後の取組みについて検討する。
- ③家庭の現状を知り、支援を必要とする保護者に対しての育児・教育相談の手法を学び、どのような援助ができるか考える。
- ④教育時間終了後に希望者を対象に行われる預かり保育では、子どもの心身の負担を考慮し、子どもの生活にふさわしい指導計画を考える。
- ⑤幼・小の連携は、それぞれが子どもに必要な体験が得られるように教育課程を編成し、教育活動を工夫して充実を図る取組みについて考える。

特別分野

(研究・研修のテーマ例)

- 園庭の環境の質を考える
- プロセスの質を重視した保育
- 5歳児が幼稚園・子ども園にいることの意味
- 非認知的能力を育む
- アクティブラーニングにつながる保育
- 多様性を尊重する態度の育成
- 公開保育を活用した学校評価の推進
- 公開保育コーディネーター養成（フォローアップ研修）の推進
- 認定こども園における8時間を超える保育についての検証

■研究・研修の視点

特別分野は、研修俯瞰図のA～F分野の課題と一部では重なりながらも、特に現在から今後の保育を考えたときに検討していくべき今日的課題を示した。

研究の主題に掲げられた「保育の質の向上」は、保育環境の質や保育の計画、プロセス、評価の質等が大きくかかわっていると考えられる。今後、様々な形態の施設において保育が展開されていくことを考えると、子どもの発達を促す、乳幼児期の保育にふさわしい環境について、研究することは極めて大切である。特に、自然を感じながら伸び伸びと体を動かすことによって体の諸機能の発達を促すとともに、人間関係や科学的な側面、言葉や表現といった様々な側面の発達を促すことが期待される戸外遊びの質の向上は、重要な課題である。現在（公財）全日本私立幼稚園幼児教育研究機構では、幼稚園の環境としての砂場に焦点をあて研究を進めているが、各地区においても園庭の環境の質について研究を進めていくことが求められている。また、何かができるといった目に見えやすい結果を重視した保育ではなく、子どもたちの「今」「ここ」の思いに寄り添いながら、子どもの成長を支えるプロセスの質を重視した保育について実践研究し、その意味や重要性を保護者や地域と共有していくことは、今後さらに大切になっていくと思われる。

また、幼稚園・こども園での最年長である5歳児の育ちについても実践研究を重ね、5歳児が幼稚園・こども園にいることの意味を今一度検討することが大切である。そして、子どもの発達や学びの連続性を踏まえて、幼児期の終わりまでに育ててほしい姿を明確化し、それらと小学校の各教科等における学びとの関係性を整理することが必要であると考えられる。最近、感情のコントロールや粘り強さ等の非認知的能力を育むことの重要性や、課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（アクティブラーニング）の充実が指摘されている。それらを踏まえて、小学校の教科等学習の単純な前倒しとならないような、真の意味で小学校以降の学びにつながる幼児教育について検討していきたい。

また、各園がそれぞれの建学の精神をもとに、よりよい園づくりを進めていくため

には、学校評価の推進は欠かせない。保育の質の向上をめざして本財団が指向している「公開保育を活用した第三者評価」について検討を重ねるとともに、公開保育コーディネーターの養成を着実に進めていく必要がある。今後、本機構が取り組む公開保育を活用した学校評価が、園運営の改善と保育の質の向上に寄与すると共に社会的にも認知されるよう、各地区の研修会で公開保育を積極的に実施し、公開園の保育の質の向上とともに公開保育コーディネーター養成の充実を目指したいと考える。

【研究・研修の手がかり】

- ①園庭という環境が子どもの発達にどのような影響を与えているか、動画や写真、エピソードなどの記録をもとに、様々な視点から研究協議する。
- ②園庭の環境の改善に取り組んだ実践事例を持ち寄り、園庭の環境の質を高めるための視点や方法について協議し合う。
- ③集団教育の中での5歳児の育ちや異年齢の子どもに与える影響等について具体的な事例をもとに協議し合い、幼稚園やこども園に5歳児がいることの意味について明確化する。
- ④小学校以降の子どもの発達について理解を進め、発達や学びの連続性を踏まえたうえでの幼稚園・こども園修了までに育てほしい姿について協議し合う。またそれらの姿を各園の教育課程にどう反映させていくか検討する。
- ⑤これからの学校教育において重要視されている視点について理解すると共に、小学校以降の学びにつながる幼児教育の在り方について協議し合う。
- ⑥公開保育を活用した学校評価の目的や実施方法について理解し、公開保育を実施したり、参加したりするなかで、その良さや課題について研究協議する。
- ⑦公開保育コーディネーター養成研修会やフォローアップ研修会を計画、実施するなかで、より実効性のある研修内容や方法について検討する。
- ⑧認定こども園での8時間を超えて行う保育が、子どもの心身の発達にどのような影響を与えるかについて実践事例をもとに検討する。また、長時間の保育をするうえでどのような配慮や工夫が必要であるかについても協議し合う。